

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年六月
凡士	楽 六弦	ありぎりす		くるみ かれん			霜里		のり子 はっち 田猫 きいち		しーしー 誠慈 しんい		音思		
遠き父今も敵わぬ草の笛 亡き父との具体的な思い出がすがすがしい。	風薫るリハビリ室の笑い声 季語の取り合わせがいいと思いました。	羅や経読む僧の喉ぼとけ	卯月波マンタ眠れぬ夜つづく	あご飛んで光る海へと舵を切る あごの飛んでいる海を船が進んでいる様子が見えます。	夏祭り運氣アップの千社札	ニ反歩のアカザのはやし休耕地	蛇苺帰らぬ昔氣にとめず	浮ばぬ句アイスコーヒーを二口	手を握りにぎり返され蛍の夜 ロマンチックですね。思い出を素直に読んで良いと思う。	初蛍とび跳ね指して追いかけて	つぶやきが聞こゆる間なり蛍道	燕行く一休みする子を掠め	叱られて麦藁帽も泣いてをり 全身を震わせて泣いている様子をうまく描いています。	温泉でながす卓球やりしい汗を	
春駒	高田はっち	しんい	光雲2	河野凡士	春代	しーしー	新井のり子	雪待月田猫	森佳月	蛍のまま	つぶ金	米山カロ ーリング	北郷興亜	宇田靖之	

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年六月
暦文 和永 きいち	音思 つづ金 梗舟 米山	きいち	楽 暦文 くるみ			楽 梗舟 光雲	春代				光雲 ありぎり す	くるみ 興亜 春代 米山		霜里 つづ金	
一人には広き家なり心太 さびしいですね。広い家と小さい天突きの口の対比が面白い。	手のひらを少し窪ませ雨蛙 子供の誇らしげな様子が浮かびました。	泥を吐く無実のナマズ桶の中 無実のナマズが面白い。	サングラスを外し入りゆく検診車	梅雨さ中総理に涙禁じ得ず	ひよこの瞳（め）裸灯浮かべ夜店かな	処方箋のどれがどれやら走り梅雨	荒ぶ世や空低くして梅雨に入る	梅雨深し花屋の窓に色滲む	青嵐ふるさとの空広々と	新緑や湯面に揺るる枝の影	夕立や確と揺るがぬ閻魔堂	強がり父の血筋や蟄蛙 季語がつかず離れずちょうど良い。父の血筋良いです。	ブラウスの色清々し初夏の風	梅雨晴や緋の蛇の目傘神前へ 緋色の傘と白無垢の鮮やかさ。	
わがん	網野月を	塚本雅洋	かれん	峰岡誠慈	小林土璃	くるみ	高松和永	霜里	立野音思	新 暦文	秋谷風舎	朝子	和田イチ子	石関六弦	

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年六月
		音思 しーしー	佳月						佳月					しーしー 凡士 しんい	
湘南をいま席卷す貝風鈴	更衣タンス２段目女文字	糠落す君の白い手なすび漬 「君」の捉え方で読み手によって色々な想像を掻き立てる句と思います。	夏シャツの裾引かれつつ出勤す 満員電車でシャツの裾がひかれるのでしょうか？	高原列車にも卯花腐しかな	熊蜂や観音の頬に止まりをり	北国の気動列車や麦の秋	ナフサ由来の袋の乱舞青嵐	若竹や石段降りて水を見る	丁半で決めよトランプ水喧嘩 まさに博打で世界を動かしていますね。	キュウリ髭ネットに巻いて梅雨に入る	新しき紫陽花浮かぶ手水鉢	大植田激しき雨を受け流す	彼の人の胸中想ふ梅雨の月	こめかみを襲う一撃かき氷 中七がまさしくそうそう。	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年六月
新井のり子	つぶ金	森 佳月	蛍のまま	宇田靖之	米山カロー リング	北郷興亜	青木鶴城	石川順一	染谷風子	渋谷きいち	平野 楽	龍野ひろし	きりり	岡崎梗舟	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年六月
	朝子 光雲				かれん 誠慈			朝子 ひろし 春代 凡士		ひろし くるみ	梗舟 田猫	朝子		のり子 はっち 六弦	
人の世の憂ひを知らず額の花	蒼天に一太刀浴びせん夏燕	見逃すな運は目の下木下闇	諸寺より晚鐘わたる薄暑かな	駅前の釣堀をゆく六月の風	天瓜粉丸ごといのちの重さかな 丸ごといのちというので赤ん坊に天瓜粉をつけているのがよく表現されている。	梅雨寒や持病の二人労りて	うすものに透くる庵主の気色かな	草笛や母を泣かせし日の記憶 草笛の音色に想いでがよみがえる。	初めての父の日欲しいのはギュツ	しばらくはキッスの余韻ソーダ水 ストロー啜えながら余韻に浸る姿が目には浮かぶ。	パステルの雨に昏れゆく額の花	麦秋やゴツホの糸杉天を衝く 目に浮かぶ一幅の絵ですね。	ねずみもち匂いし道や楚々として	そつとあく君の手のゆび蛍飛ぶ 情景が目には浮かびます。蛍の匂はいいですね。	
高松和永	霜里	秋谷風舎	新 暦文	石関六弦	朝子	和田イチ子	しんい	春駒	高田はっち	春代	光雲2	河野凡士	雪待月田猫	しーしー	

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年六月
くるみ かれん 誠慈 しんい ありぎりす			ひろし		佳月 はっち 曆文 田猫 つぶ金 六弦 のり子 くるみ 和永	霜里	興亜	和永 米山							
父の日や交わることなき双曲線 うまい。交わることもなくとも体温は伝わる。双曲線だから父親とは ずつと打ち解けることがなく過ぎたのしょうか。父上との距離 が、立ち位置の逆転を認めるのは難しいもんですからねえ。	めまとひの集団土が爪に入る	若衆の男つぷりや夏祭	何もかも止めて日曜梅雨に入る	回廊や短冊かかる江戸風鈴	退院の妻のスリッパ揃へ夏 夫の安堵の気持ちがあられています。退院おめでとうございます。 「夏」と言い切ったところが立派。愛情表現が巧み。退院の妻への何 気ない労りの気持ち凝縮された句。いつまでもお二人でお元気で。 季語がよく合っている。	こんな日は人間失格桜桃忌	どぜう鍋足の向く手の縄暖簾 縄暖簾が効いてますね	朝焼けや始発列車を待つホーム どこへいかれるのでしょうか。	搭乗の女見送る夏の霧	ボウフラは蚊になる人は爺になる	この話長くなりさう木下闇	並ばずに列は目くばせ夏のバス	白から碧に更衣ひたり富士の山	若葉風軽き足音古書店へ	
青木鶴城	石川順一	龍野ひろし	渋谷きいち	平野 楽	わがん	きりり	岡崎梗舟	かれん	網野月を	塚本雅洋	くるみ	峰岡誠慈	小林土璃	立野音思	

(6)

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年六月
														興亜	
															地下足袋にじんじんばしより田草取 じんじんばしよりの古語が良い。
															染谷風子